

立教大学

社会学部報



創刊号 2017

創刊の辞

社会学部は2018年に創立60周年を迎えます。いまや社会学部は学部学生数が2000名を越える大所帯となりました。以前から学部紀要『応用社会学研究』を発行してきましたが、これは教員や大学院学生の論文を掲載する学術雑誌であり、学部学生にとって必ずしも親しみやすいものではありませんでした。そこで、学部学生による、学部学生のための新しいメディアを発行してみてもどうかという構想が持ち上がり、2016年度に創刊準備号を発行してみたところ、幸い好評を博しました。こうして2017年度、満を持しての創刊号発行となった次第です。

立教大学は、教室棟も研究棟も各学部が共同で利用しているため、学部のシンボルになるものはありません。この『社会学部報』が、社会学部のコミュニティ・ペーパーとして、社会学部の学生生活に関わるさまざまな情報を集め、編集し、発信することによって、社会学部というコミュニティを照らし出す閃光弾となることを願ってやみません。

社会学部長 松本 康





Contents

創刊の辞

社会学部ゼミ紹介	1
木下康仁先生インタビュー	9
社会学部生座談会	18
池上 賢先生インタビュー	26
新任教員訪問	30
木村 自 准教授	30
貞包英之 准教授	33
横山智哉 助教	36
OB が語る、航空業界ではたらく	38
グローバルな視点	
社会学部キャリア支援企画	40
池袋グルメ	42
大学院生の一冊	44
大学院ってどんなところですか？	45
編集部だより	48

社会学部ゼミ紹介

「入るまでよく分からない」社会学部3年次のゼミ（専門演習2）。今回は、ゼミと教授をよく知っている各ゼミの学生に取材しました。すでにゼミに入っている学生も知らないことがあるかも…？

1、2年生は、今後のゼミ選びにぜひ役立ててください！

・ゼミテーマ

～所属学生に聞きました～

- 1・ゼミを一字で表すと？
- 2・ゼミの雰囲気を一言で言うとは？
- 3・先生の紹介

社会学科



木下ゼミ

Life（生命、生活、人生）の社会学

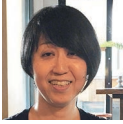
- 1・暖
- 2・ゼミメンバーひとりひとりが自分たちの考えをしっかりと持ちながらも、お互いの意見を尊重しながら、ゆったりとんびり活動しています。
- 3・性格や人柄は顔に出るとよく言いますが、その言葉通り！ な、いつも笑顔で優しい先生です。いい意味で放任主義ですが、私たちが困った時、助けを求めた時などは適切なアドバイスをくださいます。ただ、そのアドバイスが難しく、ゼミメンバーがアドバイスすら理解できないことが何度かありました…。



吉澤ゼミ

現代社会と＜私＞の関係を考える

- 1・親
- 2・興味のあるテーマについて自由に探求でき、多角的視点で話し合えるゼミ
- 3・吉澤先生は、学生が探究心を持って問えば、それ以上に応えてくれる人です。また、論文のテーマが定まらない時は、唯一の正解（これにしなさい）ではなく、選択肢（文献の紹介や方向性の候補）を与えてくれます。学生と親身になって向き合い、丁寧なアドバイスをくれる素晴らしい先生だと思います。



岩間ゼミ

「格差」「ジェンダー」「マイノリティ」から
現代社会を読み解く

- 1・穏
- 2・あっさりまったりしっかり
- 3・優しくフレンドリーで、学生一人一人をしっかりと見てくださる、知識が豊富でとても頼れる先生です。また、ゼミが始まると雰囲気を作り替えて、メリハリを与えてくださるので、学生が真剣にゼミに取り組むことができます。



松本ゼミ

現代都市 グローバルなものとローカルなもの
の交わるどころ

- 1・歩
- 2・楽しむ時は楽しむ！ 考えるときは考える！ そんなゼミです！
- 3・やりたいテーマを自分のやりたいようにさせてくれます！ 松本先生は、自分たちが考えたテーマをどうしたら学術的なものとして昇華できるかを一緒に考えてくれます。先生の豊富な知見から、問題に対する鋭い切り口を得ることもしばしば…。



小倉ゼミ

ライフストーリーの社会学

- 1・熱
- 2・ひたすらに、個と向き合って、ひたすらに、他を知っていく、そんなゼミです。
- 3・立教一の熱量を誇る魂の教師小倉康嗣。その有り余るエネルギーはしばしば、授業時間を超越し、ブラックホールの果てまで議論が発展する。しかしそれは、深い愛と広い知見からなる、学生たちの「原問題」と徹底的に向き合う覚悟から湧き上がったもの。「勉強」ではなく「学問」と向き合わせてくれる、唯一無二、本気の先生です。



西山ゼミ

コミュニティ再生！ それは「共生」から
始まる

- 1・和
- 2・メリハリっ!!!
- 3・ゼミ中は内容に関して鋭い指摘をしてくださいます。答えることが難しく、たじたじになることも…？（笑）一方で普段は和やかにゼミ生と話してくれる、まさに西山ゼミのお母さんといった感じです！！



村瀬ゼミ

行動科学の研究方法 計量社会学と 社会調査法

- 1・通
- 2・数学嫌いで文系学部に入ったのに、数学をやらなければいけない(楽しいです)。
- 3・不真面目な生徒には厳しいが、なんだかんだで救済措置を取ってくれる優しい先生。たまに何を考えているか分からないです(笑)。授業中に色々とお菓子を持ってきてくれますが、パソコンを使っていることが多いのであまり手を付けられません。



李ゼミ

仕事世界を通じて生きることや社会の仕組みを考える

- 1・個
- 2・個性的なメンバーばかり!
- 3・美人で頭がよいけれど、お茶目でかわいらしい一面もある先生です。美の秘訣はきっとキムチだと思います^^ゼミの専門分野は労働社会学で少し難しいですが、先生からいろいろとアドバイスを頂けます。



野呂ゼミ

都市空間とまちづくりの社会学

- 1・和
- 2・いつも和やか
- 3・とにかくゼミ生みんなに優しいです。ゼミでの研究についてはもちろんのこと、それ以外の個人的なことにも親身になって相談に乗ってくれる、みんなのお父さんのような存在です。そんな野呂先生が、ゼミ生みんなも大好きです。

現代文化学科



小池ゼミ

心理ブームからスピリチュアルまで

- 1・温
- 2・全体的に優しい・穏やか・フレンドリーな学生が多く、自分の意見を発言しやすい雰囲気です。
- 3・食と音楽とサブカルチャーに精通し、学生企画の食事会にも顔を出してください、お話すればするほど面白く、若々しい先生です。現在はセラピー文化論や社会学原論を受け持っておられます。学生とはSNSでもつながっており、適度な距離感で接しやすいです。



水上ゼミ

グローバルな人の移動とエスニック社会

- 1・活
- 2・行動力があって活発なゼミです。
- 3・いつも笑顔を絶やさずに授業を行っていて、一人一人の発表に対するフィードバックも丁寧です。フィールドワークを企画したり、ゼミ合宿ではゼミ生と共にレクに参加したりと、ゼミ生と積極的に関わろうとして下さる先生のおかげで、ゼミの雰囲気も良いと思います。



関ゼミ

環境と社会

- 1・穏
- 2・ゆったりとした緊張感。
- 3・いつも笑顔で教室にあらわれる先生は、とても親しみやすい教授の一人です。勉学のことだけでなく、大学生活の中でも困ったことがあれば、よく相談に乗っていただきました。普段は温和でとても親切ですが、肝心の研究内容になると核心をズバズバ突いてくる（いただける）攻撃性の高い先生です（笑）



高木ゼミ

「集まり」から都市を考える

- 1・協
- 2・自主性が求められるゼミなので、みんなで協力して頑張っています。
- 3・高木先生はお父さんみたいな存在です。いつも私達と真剣に向き合ってくれます。みんなシャイなのであまり面と向かっては言えませんが、大好きです！



太田ゼミ

グローバルゼーションと場所

- 1・和
- 2・和やかな空気の中で、さまざまな視点や角度からの意見が交わされるゼミです。
- 3・キリッとした雰囲気とフランクな雰囲気と、両方で接して下さる先生だと感じます。それぞれの発表に対しては、詳細な部分にまで触れていろいろな意見をくださいます。最近では夏合宿の話になると先生はとても楽しそうです。



阿部ゼミ

持続可能な社会の創造に向けた総合的な環境教育

- 1・穏
- 2・穏やかな雰囲気でのびのび活動しています。
- 3・とても優しく、ゼミの活動などに対しても真摯にアドバイス等をくださり、頼もしい存在です。また、気さくな方で先生自ら積極的にコミュニケーションを取ってくださるので、明るく楽しくゼミ活動が行えています。



石井ゼミ

グローバル化と多文化共生

- 1・素
- 2・笑いが絶えないアットホームな雰囲気です。
- 3・ちょっとした学生の発言もたくさん拾ってくれる、学生思いの面倒見の良い先生です。小さな体でいつも一生懸命声を出して授業をしてくれますが、天然な一面もあり、見ていてごみます。



小泉ゼミ

アートや創造性と、社会形成

- 1・知
- 2・個性派揃いで女子率高め。
- 3・どんな話でも楽しそうにお話する姿が印象的。ついつい盛り上がって、自分で「うーん、この話は長くなるからまあいいや」と打ち切ってしまうこともしばしば。気になるから、教えて下さい！ と思ってる学生も多いのでは。



木村ゼミ

文化人類学的フィールドを通して、境界に生きる人々、国境を越えて生きる人々の生活文化を探る

- 1・自
- 2・自由に学べる！
- 3・宮古島のマーメイド♡ 関西出身で気さくでとっても優しい！！ なんと中国語と英語も堪能だヨ！！ ちなみに将来の夢は餃子屋さん！



貞包 (さだかね) ゼミ
消費社会と都市の文化

- 1・蓄
- 2・ひかえめながら各々が情熱を持っている。
- 3・非常に勤勉で知的な印象を受けます。物腰は穏やかながら、多様な理論と先生ご自身の体験に基づく豊富な知識を熱心に披露して下さり、こちらの興味関心を引き出してくれます。

メディア社会学科



是永ゼミ
メディアの利用やことばが関係する社会的現象について考える

- 1・真
- 2・個性豊かな一人一人が、自らの目標に真っすぐ向き合い、真剣に取り組んでいます。
- 3・穏やかで真面目な雰囲気ですがアクティブで多趣味な一面もあります。多くのアドバイスを下さり、学生一人一人の自立を促して下さいます。



砂川ゼミ
自ら考え行動する人の育成

- 1・虹
- 2・切磋琢磨
- 3・砂川先生は僕たちゼミ生のお父さんみたいな存在です。さらに毎週ゼミ後に必ずご飯に連れて行って貰える等、ゼミ生の話を親身に聞いてくれます。また活動の中で社会の基本的な礼儀も教えてくれます。優しさと厳しさ両方を兼ねそなえた先生だと思います。



生井ゼミ
これ！ という決まったテーマはありません。そこが生井ゼミの特徴かな。好きなことは何でもやらせてもらえます。

- 1・戦
- 2・休学組も多いですが、年度関係なくはっちゃんけてます。メリハリ！
- 3・「生きる辞書」。ツンデレなゼミ生みんなのお父さんです。自主性を大事にしていて、私たちが一生懸命取り組み始めれば同じだけ一生懸命返してくれるジェントルマンです。ボクシングが趣味です。英語ペラペラです (多分)。



橋本ゼミ

行為＝思想としてのジャーナリズム／メディア仕掛けの〈世界〉

- 1・結
- 2・だんだん結束していく。
- 3・普段は厳しい目をしているように感じられますが、実はとても優しい目で学生を見守ってくれています。溢れんばかりの教養と蓄積を語りだすと止まりません。最近は彫刻に力を入れておられるようです。



木村ゼミ

ソーシャルメディアなどメディア・コミュニケーションと社会を考える

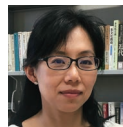
- 1・村
- 2・村が作れるくらい個性あふれる人たちの集まった木“村”ゼミです！
- 3・木村先生は私たちにとってお父さんのような存在です。木村パパと呼んでいます。先生は私たちに対していつも優しく真剣に指導して下さいます。そんな先生に夢中になる学生が近年急増中です。あなたも是非木村ゼミという名のファンクラブに入会しましょう！



井手口ゼミ

音楽社会学

- 1・音
- 2・自由。話が盛り上がり、話題がテーマから大きく脱線することもよくあります。
- 3・優しく明るい先生です。扱っているテーマがテーマなだけに講義中に歌い出すことがしばしばあります。もちろん常に歌っているわけではなく、論旨の甘い箇所をこれでもかというくらいに指摘してくる鋭い視点も持ち合わせているので、ゼミ生は皆、心の奥底で先生のことを尊敬しています。



林ゼミ

多文化主義の視点からメディアのあり方について考察し、分析する

- 1・色
- 2・メンバーそれぞれに色々な個性があり、刺激ももらっています。
- 3・ゼミを進行していくのは先生ではなく学生であるとしても仰って下さり、ゼミに対して気になるところや要望を私達ゼミ生から引き出して頂いています。これからも、先生とゼミ生との距離をより縮めていけたらと思っています。



和田ゼミ

情報社会の「ミライ」を考える

- 1・新
- 2・先端のツール、アプリケーションに悪戦苦闘しながらも、みんな移り変わりの激しいこの時代に必死に食らいついています！
- 3・和田先生は一見あまり愛想がなさそうに見えますが、ゼミや私たちゼミ生のことをとてもよく考えてくれる優しい先生です！



井川ゼミ

歴史的観点からマスメディアの構造や影響の考察や分析を行う

- 1・色
- 2・個性も強いけど和やかで自由
- 3・いつもニコニコしていて私たちを見守ってくれている先生です。ゼミの時間にいつも癒されてます。井川先生は癒しキャラですが的確な指摘をしてくださるのでメリハリのあるゼミになっています。



黄ゼミ

グローバルコミュニケーション論

- 1・真
- 2・みんなとても真面目で、ゼミ活動お互いに協力し合って取り組んでいます。
- 3・言語に長けてる方で、日韓英に加え、中国語も現在勉強しているそうです。その他、ゼミ生の普段の活動にも興味関心を持っていただいております、とても親切な良い先生です。

(学部報取材班：浅野有亮、川内ゆめ子、杉山奈緒子)

木下 康 仁 先生インタビュー

出会いがあれば、別れがある。本学社会学部社会学科を卒業した後にアメリカは西海岸へ飛び、そして思いも寄らぬ出会いを経て社会学部の教授となった木下康仁先生にとって、2017年度は立教での最後の年となった。それを偶然だと語る教授に迫る。



【きのした・やすひと】立教大学社会学部教授。1953年山梨県北都留郡小菅村生まれ。1976年立教大学社会学部社会学科卒業後、1979年にUCLA修士課程、1984年にUCSF博士課程修了。財団法人に勤務した後、1993年に立教大学社会学部社会学科助教授、翌年教授に就任し、現職に至る。研究分野はエイジングとケアの社会学、社会老年学、成熟社会論、医療社会学、グラウンデッド・セオリー・アプローチを中心とした質的研究法。

10代の頃

——高校生くらいのときは何をやっていましたか？

高校生をしてみましたよ（笑）。私は都立高校に通っていて、1969年が高校2年生の時で、日本の社会が騒がしかった。1つには、1970年に、日米安保条約の改定があって、それは政治問題になった。もう1つは、ベトナム戦争が激しくなっていた頃で、日本の基地が使われることに対する反対運動がありましたね。加えて大学紛争が重なっているような時期で、高校でも学園紛争っていうのがあったんですよ。

1969年が一番激しかったのかな？それで、私のいた高校は結果的に受験勉強を高校がやるのはけしからんという感じで、私が3年生になった時はその授業

がなくなったんです。だから、ほぼ毎週、半日みたいな（笑）。あとは自主学習のような感じだったかと思いますね。そういう時代だから触発されて本はいろいろ読みましたよ。早熟だった気がします。マルクス主義関係の本とかも、当時の高校生の雰囲気からすると、読んで普通。今の学生さんは読まないかもしれないけれど……。そんなことが高校時代としては一番思い出すことかな。

その都立高校には定時制課程もあって、定時制課程の日本史の先生が昼間の日本史も教えてた。その先生が一橋の大学院の国内留学制度で社会学を1年勉強して、復帰したばかりだったんですね。そこで一橋大学のゼミで読みかけてた本を僕らのクラスで関心がある人は一緒に読書会をしませんかと先生から提案があって、僕も参加したんですよ。その本は英語で1000頁もある『The

Authoritarian Personality』(権威主義的パーソナリティ)、後に訳書が青木書店から巨大な本で出ました。

この本はファシズムの社会心理研究で古典として知られています。ナチスから逃れてアメリカに亡命したアドルノという人とそのグループが、ナチスがなぜドイツでああいう形で発展したのかを考えたと本です。でも、先生が大学院で読んだ内容で、高校生向けではないわけですよ。その先生がなぜ提案してくれたかっというのも、多分その先生自身が読みたかったんだと思いますよ。僕らに教えてくれるというよりは(笑)。でもそういう刺激を得る機会を与えられれば、そこから何か始まるっていうこともあるわけで。それでこの本の読書会を高校3年の時に始めたんですよ。

これを最初は5~6人で、半年経つ頃には私だけになっていて、その先生とサシで読み合わせをすることになったんですけど(笑)。その時の読み方が「訳さないで、段落ごとに要約を書け」。これは昔の本だから単元が長いんですけど、そのセクション全体について要約する。そういう方法を身につけました。そして、高校3年生だったんだけど、1人になっちゃったから辞めるに辞めれなくて。

——その本は全部読み終えましたか？

でも結果、全部読んでるよ。今考えたらすごいね。1年くらいかかったかなあ。

そんなことが僕の高校の時の勉強としてありました。その影響で最初はファシズム研究をやりたかった。今の社会学の差別と偏見への見方とは理論的なアプローチも違うんだけど、大衆心理の暴走とか、社会を狂わせてしまったわけでしょう。そういったことを高校で勉強したので、とにかく最初は社会心理学に興味がありました。

立教での学生生活

大学に入学した時はあんまりパツとした雰囲気記憶はないね(笑)。なんかのっぺり淀んだようなイメージです。日本の大学は大学紛争の後、つまり祭りのあとっていう表現がありますけど、そういう弛緩したような感じで、それにカリキュラムも今みたいにしっかりしてなかったんですよ。学生数も少ないし。1・2年で何を勉強したのかも覚えてないです(笑)。

アルバイトはしてました。昔は家庭教師が一番スタンダードなアルバイトとしてあったんですけど、僕は肉体労働者のアルバイトをしてましたよ。一番長くやったのはスーパーマーケットの床磨き。スーパーで社員が出勤してくる前に、床をグルグルする機械でモップ掛けするんですよ。始まるのは朝6時ぐらいからで、おぼさんの社員か正社員かどうかかわからない人たちが床掃除してて。

僕の使う機械は重かったからそれを担

当してくれる人としてみんなからありがたられて、その時に、いろんな人生の経緯でいい年になって体力にも堪えるような仕事を朝早い時間からしてる人たち、おばさんたちの世界の仲間に入ったというか、人の人生の話を書くことについての関心を持った1つのきっかけになったかな。それはちょっと硬い言い方をすると他者についてのイメージが具体的に考えられるようになった。

アメリカへ

大学3年の夏に、2つのきっかけが重なって、初めてアメリカに行くことになりました。最初の方は、戦前から始まって今もある日米学生会議がきっかけです。日本とアメリカの学生が集まって交互に会議をする。1974年の夏はミネソタ大学が会議場でした。参加するにはちょっとしたテストがあって、受かって参加することになれば、全額ではないけど企業の補助もついてくる。それで夏の間約1ヶ月、ロサンゼルスからニューヨークまで団体であちこちに行きました。

会議とは関係ないけど、ニューヨークでツインタワービルの上の方の日本企業のオフィスにまで行かせてもらいましたよ。テロで潰れたビルの上のほう。それから、シカゴのエバンストンって街でホームステイしてる時にちょうどリチャード・ニクソンが大統領辞任のテレ

ビ中継をしていたのはよく覚えてる。ミネソタ大学での会議が終わったあとは、サンフランシスコに行った。そこまではグループで動いてた。グループはそこで日本に帰って、私はそこから、約半年くらいロスにいました。今もある松崎奨学金を貰えていたので。

松崎奨学金は非常にユニークな奨学金で、まず外国に行って自分のなんらかのプロジェクトを実施してることが条件だった。だから大学で学生として勉強する種類じゃないんです。その時期の日系アメリカ人三世の代が自分と同じくらいの年齢だったので、彼らのコミュニティー活動とエスニック・アイデンティティーみたいなテーマのフィールドワークをするということで私は奨学金をもらっていたわけです。それからロスでの生活があって、帰国して4年生でその時のフィールドワークを基にして卒論を書きました。それが社会学部の研究誌『応用社会学研究』に載ったんですよ。学部の卒論は載らないんですけど、なぜかそこに載せて貰うことができて、それが私の掲載された最初の論文になりました。それが大学時代。

教授になるまで

他の先生たちはちゃんとしたキャリアパスを通して方が多いと思うんだけど、私は本当のことを言うとたまたまのつながりなんですよ。私が卒業したのが

1976年で、73年のオイルショックから日本の経済は不況、だから卒業した時には就職難。でも元々就職する気は無く、その当時は定時制の高校の教員になりたいなと思ってた。定時制の高校っていうのはさっき言ったところにつながるんですけど、ああいう生活っていいなと。気楽そうに見えたし(笑)。

だけど、大学3年の時にロスでフィールドワークをしていたから、教員資格を取るための教育実習の基礎的な単位が取れてなかったわけですよ。だからどうしようかなと思ってた時に、たまたまロータリー国際財団というところの留学生試験を受けたら、偶然受かった。それで1年間、国際親善の位置付けが強い奨学金でUCLAに行きました。

UCLAではAsian American Studiesってマスターのプログラムがあって、その中のJapanese American Studiesで修士論文を書きました。だから、最初1年目はロータリーの奨学金で行って、もうちょっと勉強したくなって、2年目はカリフォルニア大学からフェローシップ、奨学金をもらいました。フェローシップっていうのは単なる奨学金と違って授業料が全額免除で9ヶ月間は生活費も支給されるんですよ。それでアルバイトしなきゃいけないわけ。それでマスターが終わるともっと勉強したくなるわけですよ。でも金はないわけ(笑)。元々家は貧乏だから自費で行くのはありえないからフェローシップとセットでア

ドミッションを出すところ以外で続ける道がなかったんで、いくつか応募してカリフォルニア大学サンフランシスコ・メディカルセンターって呼ばれてるキャンパスに博士課程に移ったんです。それが1979年の夏。

それから84年に博士号が終わるまではそこにいました。その間、1年間は博士号のフィールドワークのために日本に帰りましたが、最初にアメリカに行った時はロータリー財団からお金をもらってたのですが、帰国時には金がない(笑)。だから日本に帰って来れたのは博士論文のための研究助成金がもらえて、初めて旅費とかも賄えるようになった時。留学生だと全部挫折して帰るか、学位をとって帰るか、2つに1つ。奨学金の更新は1年ごとなんで、1年でもそれが取れないと自分で生き延びないといけない。そういう意味ではすごくラッキーで、全部フェローシップをもらって終わることができて、加えて研究助成がついてたから、論文書きにもう1回サンフランシスコに戻って、卒業して、引き払って日本に帰って来た。

アメリカでの生活

図書館は24時頃まで開いていたので、一番勉強した時は、昼のサンドウィッチと夜のサンドウィッチと2つ持って、ギリギリまで勉強してましたよ。

奨学生は働いてはいけないとはいうけど、一応大学内でのアルバイトはOKだった。大学の中にあるカフェテリア、日本でいう学食でローストビーフをサンドウィッチ用に切り分けてお客さんに出すバイトをしてたんだけど、ちゃんと仲間ができたりすると顔を見ただけで肉の量とかを阿吽の呼吸で盛ったり（笑）。

あと大学院では勉強もしたんだけど、掃除もしたわけ。俺、なんか床掃除が色々繋がるってところがあるみたいで（笑）。図書館が閉まるちょっと前から掃除部隊が入るんだけど、床に色々落ちてるんだよね。何かというと、みんなかぼちゃの種とかをボリボリ食べながら勉強してたんだよ。かぼちゃの種は薄いんだけど、上手に歯で割ると綺麗に中が食べれる。それで殻を捨てるんだけど。そんなに上手に種を破ろうとしたらとても勉強なんて頭に入らないはずなのに、床掃除したらそういった種の塊になるんですよ（笑）。

それから帰国してからは10年近く民間で非営利の財団法人、経済的に自立した高齢者を対象にした老人ホーム、日本ではその言葉はまだなかったんですけど、アメリカでいうリタイアメント・コミュニティを建設したり運営したりしているところで働きました。

当時はまだ高齢化が進んでいなくて、これから進んでいくという時に、時代を先取りしたような場所だよな。経済的に

自立した人たちが集まって暮らす定年後のライフスタイルはアメリカでは普通なんだけど、日本はやっぱり家族が強かった。そこで就職したけど、実は自分の博士論文の調査をしたのもそこだったわけ。その博士論文は英語で本にもなって出てます。

時系列を整理すると、UCLAはマスターで2年間、博士課程はUCのサンフランシスコのキャンパス、博士論文の調査に出たのは1982年ごろ。博士号っていてもコースワークって最初の2年ぐらいは科目が決められてそれを全部取ってクリアしていかななくてはならなかった。その後は博士候補生という制度があって、筆記の資格試験を取らないと入れなかった。大変な試験で半分ノイローゼになるような（笑）。その試験をパスしてから初めて博士論文の調査ができるようになって、日本でフィールド調査をしたいということで研究助成に申請して、お金をもらえるようになって日本に帰国した。1年後には論文を書く目的でサンフランシスコに戻りました。半年で書いて、1984年にまた日本に帰ってきて、それから10年くらい働いて立教大学に移りました。

エイジングの社会学

僕のいた博士課程はHuman Development and Agingっていう英語名の表記で、そもそも生涯にわたる人間

の発達研究がベースにあって、その上で高齢化の問題が研究されていた。社会老年学、最近ではSociology of Aging、エイジングの社会学って呼ばれることもあります。研究の関心は高齢者。それについては、立教に来る前から国際研究を始めていました。スウェーデンについて、オーストラリアについて本を書きました。これは政策面からの視点が大きかったですね。

あとは、自分は町田市に住んでるんですけど、ちょうど日本の中で高齢化の問題に対して、国の制度からコミュニティの動きまでがすごく活気付いた時期だったんですよ。その中で地域運動にも参加して、しばらくは大きな活動グループの代表をしていました。

地域住民が社会福祉法人という法人格を自分らで取って、市が土地と施設の建設費をサポートしてくれて、一言でいうと地域住民が自分たちのために高齢者のサービスセンターを作って運営する。これは全国的なニュースになったりしました。研究というよりは実践的な運動に近いですね。



木下先生研究史

最近に至る流れで言うと、質的データの分析法、M-GTA（実践的グラウンデッド・セオリー）の研究。検索したら名前がそっちの方でボロボロっと出て来て、結構自分でも思いもしない広がりになってます（笑）。データの分析方法の開発が最近の仕事です。

あと、科学研究費という研究助成制度があるんですけど、それで家族介護者の国際比較研究、その前に日本とスウェーデンの地域社会のレベルでの比較研究、高齢化についての比較研究をしました。国の制度とか、自治体の区役所とか、職員、市議会議員はどういう役割なのか、地域で活動している人たちを同じ水準で日本とスウェーデンを比較したようなプロジェクトです。それは英語の本になりました。

そのあとはケアラーの研究で、イギリスのモデルを紹介しながら、介護は特別なことでなく誰もがいつか何らかの形で携わることだと、ライフスタイルとしてのケアラーという切り口を入れて、高齢者、障害者、子ども、子育てと虐待防止、ペットも加えて論じました。つまり介護はライフスタイルの1つになっているという基本的な捉え方をベースに、多様な形態を取り上げて、それに国際比較で一番進んでるオーストラリアの例を入れた。それも本になってます。

今やってるのは、最後になるかもわか

らないですけど、大学や学校、市民大学、カルチャーセンターとかいろいろところで、リタイアした人たちが勉強していることについて、リタイアした後の生活で「学ぶ」という経験の可能性を国際比較の視点を入れていま進めています。

研究での国際比較

国際研究の視点を入れるのは楽しいよね。スウェーデンとかイギリス、オーストラリア、ニュージーランドでも、フィールドワークに行くのは楽しい。主に僕の専門だと対象は西欧系の国だったけど、10年くらい前にたまたまバングラデシュが繋がったんですね。先進国が抱えている福祉国家の課題を見ていくと、実は最貧国と呼ばれているバングラデシュのような国で行われている NGO の活動が非常に参考になることに気がついた。

社会の中間層、家族、企業や教会、地域が入っている中間領域、社会学が主に対象とするのは社会の中で中間領域なんですけど、そこにこれからの社会の課題を考えて行くときの可能性があるということは大方向一致する見方です。そこでどういう可能性があるのかを考えた時に、日本とかで言われていることは、ある意味で言語が飽和化しているというか、新しいアイデアが出にくくなっている。

それに対してバングラデシュの NGO を例に見ると、新鮮な問題意識が引っ張り出せるというか。社会を形成する新し

い価値の作り出し方とか、人間をどう捉えたいか、我々の当たり前となっている発想だけではなくに窮屈になる局面でも、新鮮に伸びやかに生きている。そういう例でバングラデシュは面白い。

メキシコ料理からモンゴル料理まで

僕は素朴な食べ物にはすごい関心があります。食べ物でいうと今一番好きなのはバングラデシュの田舎料理。あれ食べるんだったらもう一回行っても良いかなって（笑）。食べれなくても行っても良いんだけど、食べたいってことも入れれば行きたい思いが強くなる（笑）。

それとメキシコ料理のエンチラーダが面白い勝負。バランスが良いし、美味しいじゃないですか。肉ばかり食うのと違って野菜も適度に食べられるし。サルサとか豆。

僕は料理を自分で作るのは全然嫌じゃなくて、むしろ好き。家事も全然違和感がないです。床掃除は広いスペースがないとあんまり面白くないけど。僕はすごい田舎で生まれて、小さい頃はおじいさんが面倒を見てくれた。おじいさんは料理もしてくれてたから、その影響で家事に抵抗がないんですね。アメリカでは自分でカレーとかも作ってましたよ。今でも時間があれば。嫌いなものとかもないです。

モンゴルの人は、塩でただ湯がいただけで骨つきの肉をナイフで削ぎながら食

べたりしてるんですよ。あれは食べてみたいなって思いますね（笑）。そういう素朴さが好きです。

だから僕はマヨネーズとかオイスターソース、ウスターソースなどをすぐに使うのは好きじゃないです（笑）。アメリカにいたときは朝食がドーナツとかでびっくりしたよね（笑）。でもベーグルは好きだよ。あれはもともとユダヤ系の伝統的な食べ物で、イーストで発酵して作る。海外のベーグルってかなり噛み応えがあるよね。ベーグルにサワークリームやスモークサーモンとかを挟んだやつはすごい美味しいですよ。

オランダやドイツとかでニシンを少し酢漬けにしてる半身をパンとかに挟んで食べるんですけど、あれも美味しいですよ。鯖サンドとかは似てますが、鯖は調理してますよね。



退職後の予定

——退職後は飲食関係とかいかがですか？

あれは趣味だからさ（笑）。退職後はなかなか想像しにくくて。普通の会社員だったら、会社員の生活があってリタイアメントみたいな非連続な移行になると思うんですけど、僕らの仕事ってゆるゆるダラダラとしているんですね（笑）。だから変わる部分がどこで、変わらない部分がどうなってるのか突入してみないとわからない。家にいるとしても本を読んだり書いたりすることはできるからね。

学生へのメッセージ

——面白い本、読んでほしい本を教えてください。

僕みたいな人間に聞くとなると、それはすごい難しい質問で（笑）。「教える」という文脈があれば今の学生さんと一緒に古典を読むのは楽しいイメージが浮かびますが、本当は自分でこれだけ書いたりしてきてるので、それを読んで理解してもらいたい思いはありますよね。

——好きな小説とかはありますか？

好きという意味合いが変わってくるんですよ。ある時はある人のをめちゃくちゃ読んだりするんだけど、それはずっと続かないですよ。飽きてくるところがあって。もともと書く時は座って、読む時は専門書でも寝っ転がってるんです

けど、眼鏡を掛けながら寝っ転がって本を読むのを快適にする解決方法ってないのかなと思ってます（笑）。最近はとにかく老眼が進んできてるから（笑）。とにかく若い時はいろんな本をいっぱい読んだ方がいいですよ。

仕事の読み方だと、目的があるじゃないですか。著者の思考や理論を押さえてくると、読みながらも一つ奥を読んでその中に著者像を再構成する。そのためには何冊か読まなくちゃいけない。その人のイメージができてくると、自分の色々な仕事の中でどこでそれをつなげればいいのかとか、参考にできるかがひらめく。自分の関心で動いている時は自分の関心に沿って本をどんどん買っていきますよ。

今の学生さんって本はあんまり読まないでしょ。本っていうのは1つの世界だし、自分を鍛える世界だから、いずれアウトプットをするにしても本を読まない底が浅いものになっていくんじゃないかなと思いますね。

人間が生きていく上で考えていかなくはならない根源的な考えに対してのセンシビリティが鍛えられないままに人生を歩んでいくと、例えば他者を理解する、共感するとか人の運命をどこまで理解できるかとか、一生でどこかに出くわすような厳しい局面に耐える力は、本の知識がないと大変な気がしますね。ネットとか違うチャンネルもあるが、本も1つの対話だから、その世界を知らないというのはすごい勿体無いよね。

立教大学社会学部について

立教大学は私学じゃないですか。私立の学校は言葉で言うと、「建学の精神」があって、立教は聖公会のキリスト教で、その意味をどう考えたらいいいのかなという問いの共有は大事です。これは学部に限らないし、大学の全体としてもただ経営がうまくいけばいいだけではないと思います。どういう学生にどういう教育をしたいのか、他と比べて差異化が図れて、その内容が「建学の精神」に基づいていれば良いなど。

ひっくりめると、私学の良さを学部の中で築き上げていってもらいたいと思いますね。どの時代でも人は来てやがて去るんですよ（笑）。歴史が古くなると、それが伝統というすごいものになる。

人は消えていってもそのプロセスで変わらずに残る部分はどうか考えたらいいかという話です。私立で他と違う部分というのは、どの時代でもその時いる人たちが考えながら築いて、それを継承していかないといけない。そういうのが今は非常に分かりにくいかなと思います。でも、去るものは静かに去ればいいというのが僕の考え方ですね（笑）。

（取材・文・構成：船津晃一郎、伊藤元彦）

社会学部生ってどんな感じ？



《Mちゃん》

社会学部現代文化学科1年生。
出身は栃木県那須塩原市。
東京の雑貨屋巡りを休日に楽しんでいる。
好きな言葉は「全力」。

《Iくん》

社会学部社会学科2年生。
出身は東京都八王子市。
スポーツと音楽とバイトが大好きで、
ヒマがとにかく嫌い。好きな言葉は「忍耐」。



《Nくん》

社会学部メディア社会学科3年生。
出身は福岡県福岡市。
映画とライブでなんとか元気を出している。
好きな言葉は「縁側」。

今回はこの3名にご協力いただき、学生座談会を実施しました！
在校生の方はもちろん、特に受験生の方に読んでいただきたい内容になっています！
ぜひ！！

——早速ですが、皆さんは、一週間をどのように過ごしていますか？

M：えーと、1年生はですね、もちろん
全体(授業がない日)は無いですね。

I：ない！ ないよね！

M：そして社学は、土曜日の1限に英語
があってすごつらいです。

I：なるほど。授業はやっぱり必修に合
わせて取った感じ？

M：そうですね。私の場合は全体的に
まんべんなく入ってる感じですか
ねえ。

N：英語(笑)。必修懐かしいな。

I：確かに(笑)。2、3年生はないから。

M：あ！ ないんですね！

I：そ！ 必修は一応あるけど、英語と
かの必修が無くなるんで。

N：取りたい人は取れるけど。

I：そうそうそう。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
1 時限				英語 D	流行論	英語 P
2 時限	国際社会の中の宗教	英語 RW	フランス語			
3 時限	現代文化論	公共性の社会学	文化の社会学論		社会学原論	
4 時限	フランス語			社会調査法 1		
5 時限			グローバル社会での平和構築	G・イシュー各論		

Mちゃんの時間割 (1年)

M: え、取ってますか?

I: 僕は、中国語中級を一応取ってます。英語は取ってないけど。

N: もう取ってないな〜、英語は。

I: 取らない人の方が多いかな〜。

M: あー、そうなんですネ。

I: じゃあ、バイトとかしてる?

M: してないです、私 (笑)。

I: あ、してない? じゃあ、普通に家帰ったら、なにしてますか?

M: 家帰ったら、ひとり暮らししてるんで、家事とかしちやいますね。

I: なるほどね。

M: で、5限がある日とかは、もう帰ったら、すぐご飯炊いて、みたいな。

I: じゃあ空きコマとかはなにしてる?

M: 空きコマは、木曜日に、2、3限って空きコマなんですけど、その時はけっこう勉強したりしてますね。

I & N: へー!

M: あと、本! 図書館にいます!

I: 授業の勉強とか?

M: そうです。「しゃかちょう」(社会調査法)の勉強とか。

N: さすが1年生って感じだね!

M: いやいやいや (笑)。テストに向けてですよ!

I & N: えらい!!!

M: まあ、そんな感じです。はい。

I: 2年生は、僕の周りにはけっこう全体ある人多いんですけど、僕はないですね。5限だけの日は、朝からバイトして、5限に出てくるって生活をしてて。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 時限					図書館情報技術論
2 時限		宇宙の科学		専門演習 1	政治と社会
3 時限	現代文化論	消費社会論		世論調査論	中国語中級 1
4 時限	中国語圏の文化	中国語中級 1		社会統計学	教育社会学
5 時限	図書館制度・経営論	社会調査法 3	情報資源組織論		

Iくんの時間割 (2年)

N: 忙しそう…。

I: 他に空きコマがある日が無いんですよ。2限か3限から始まって、5限まであったりするんで。

M: つめつめっていう感じですか?

I: そうそうそう。で、とりあえず1限

入れたくないっていう感じで授業をとって。

N : わかる (笑)。

I : 夜は、4限終わりの日はバイトしたり、5限終わりの日はサークルに行ったりしてますね。で、土日は、授業無いんで、バイトするか遊ぶかってとこですかね。

M : 必修って、5限に入ったりしてますか？

I : 学科ごとによって、僕の場合は、5限にあるタイプで、いろんな人がいて、1限にある人もいるし、っていうね。

M : つらい。

I : まあ、2年になると、学科ごとで変わってくることもあるかな～。

N : 専門演習1も始まるよね。

I : そうですね。だから、1年生とはまた違った必修の感じなのかな、という印象です。

M : なるほど！

N : じゃあ、3年生の私はですね、全休が1日だけあるのね。その全休の日は、もう、お昼まで寝る！ お昼まで寝て、夜出かけるっていう生活を送ってますね。そして、体育会ホッケー部に所属してるので、平日は、月曜日だけ練習が休みで、火曜から金曜はあるんですね、練習。もちろん土日もね。だから、普通の学生とは違う生活かな (笑)。3限まで授業受けて、そこから富士見グラウン

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1時間				出版産業論	
2時間	スペイン語圏の文学	専門演習2	教育学への招待	グローバル都市論	
3時間		ポピュラーカルチャー論	文化表象論		
4時間	仏教の世界	労働社会学			
5時間				広告・PR論	

N さんの時間割 (3年)

ドっていうところに向って、そこで練習しています。

M : 大変ですね…。

N : 日曜日なんかは1日中練習で、本当に部活ぶけの生活だね。

I : 部活以外で、なにか時間を使う事がありますか？

N : 部活以外では、空きコマに映画よく見に行ったり、めちゃくちゃ本読んでたりするかな。あとは、たまに時間見つけてライブに行ったり、なんとかオフを満喫しようと頑張ってる。

I : え！ 楽しそう！！

M : 本当、充実してますね！

I : 3年生は授業とか、大変ですか？

N : 3年生は、全休は取れるんだけど、3年生のうちに卒業単位数を取っちゃいたい人と、別に4年生に繰り越してもいいと思ってる人がいるのね。で、前者に当てはまる人は、今

すごい忙しい。

I：なるほど。

N：けど、別に4年生になっても授業受けてもいいやって思ってる人は、例えば、今の春学期も、12単位とかしか取らずに、全体3つ作ってる人とかもいるよ（笑）。だから、3年生は自分の過ごし方によるかもしれない。

I：そうすると、人によって過ごし方はけっこう変わってきますね！

N：そうそう。インターンとかも始まるから。

I：大変ですよ〜。2年生は、あまり変わらず忙しいって感じかな。

M：1年生ぐらい、授業はあるんですか？

I：1年生ほどではないかも。土曜は授業がないし、精神的にはだいぶ楽（笑）。

M：土曜、本当に、やだ（笑）。

N：この気持ちが偉い人たちに伝わるといいね……。

——そうですね（笑）。では、実際に社会学部に入ってみて、自分の理想と現実とのギャップを感じたことはありますか？

M：そうですね、私はいい意味で期待を裏切られた感じですかね。どの学部にしようかいろいろ迷ってて、その時に、現代文化学科っていうのがパンフレットに載ってて、そこに、ポピュラーカルチャー系の話が載ってたんです

よ。それで、ポピュラーカルチャーいいなあとと思って、現代文化学科に入ったんですけど、それだけじゃなくて、自分が思ってたことも広がってたんですよ。例えば、社会学とファッションに繋がりは無いと思ってたけど、繋がってたし。

I：確かにね！ それはあるかも。

M：私は芸術系が好きなんですよ。アートとかファッションとか。そっちに広がってるのを入ってから知って、それからすごい授業が楽しくなりましたね。

I：いいね！ 3年生はどうですか？ 長く学校に通ってみて。

N：最初はメディア系のことが本当にやりたくてメディア社会学科に入ったんですけど、思ったより、メディアの専門的な授業は少なくて、だからそこは自分で待ってるというよりも、社会学は本当、自分から学びにいかないと自分が本当に知りたいことは知れないなっていう印象を受けました。

M：積極的にならないとダメなんですね。

N：あとまあ隣の芝は青いっていうけど、メディ社にいと現代文化学科にめっちゃ入りたくなったりした（笑）。

I：すごいわかります（笑）。

N：しゃかしゃか（社会学部）がすごいうらやましくなったり、っていう時期はありましたね。

M：へー！ でも私、メディ社だけ社会学部でも知らない感じがします。

I : ああ、本当？ 僕は1年在学した身としては、キラキラってイメージですけど。

N : かわいい子、多いよね～。

M : そうなんだ！

I : メディ社の人はみんな明るいし、みんなハキハキしゃべるような気がする。社会学、しゃかしゃかは真逆ですよ、ガイダンスとかみんな下向いてる。誰もしゃべれないもん(笑)。

M : あはははは(笑)。でもわたしのイメージ的にメディ社はみんなやっぱりカルチャー系が好きだから、なんか夢がキラキラしてる感じがします。

I : そうそう！ 目立つ感じの人が多いですよ。

M : でも、社会学科とか現代文化学科って実際何やるの？ って言われたらちょっとよくわからなくないですか？

I : うん、よくわかんない。暗い方をやるよね、世の中の的に(笑)。

N : ちょっと落ち着きを求めるのかもしれないね(笑)。

I : そうですね、どっちかって言うと(笑)。僕は、入学してけっこう理想通りだった感じですかね。社会学部に入りたかったのは、将来やりたいことが決まっていなかった僕にとって、1番よくわからない学部で、色々広く学べるかなって思ったんで社会学部にしました。実際に通ってみて、色々学べてるし、社会調査法やるなんて思わなかったし(笑)。

M : 私も「しゃかちょう」とかあると思ってなかった(笑)。

I : あれは、個人的にはあんまり好きじゃないけど、学びっていう点で見たら、新しい視点かな、と思います。

M : この前友達が、NHK からアンケートきたとか言って一緒にやったんですけど、「しゃかちょう」やってたせいで、あれ、キャリアオーバー効果みたいなのやつ。なんか自分で考えちゃうんですよ(笑)。

I : いろいろ考えちゃうよね(笑)。僕も大学入ってから調査票とかのあら探しをすごいするようになりました(笑)。

N : この質問はちょっと違うよなみたいな(笑)。

M : そうそうそうそう！

N : なんか日常でちょっと実感するっていうのが多いと思うな、社会学での学びは。

I : 日常で実感できるっていいですよ。まあ人それぞれギャップはあるのですが、実際に自分がどういう風に学生生活を送るか、っていうのが、理想の実現には1番大切な気がしますね！

N : そうだね！ 何事にも積極的に取り組んでいくべし！！

——今までで、面白かったなと思う授業があれば教えてください。

M：私は、流行論（渡辺明日香先生、ご所属・共立女子短期大学）がすごい楽しかったです。映像とかを授業でみるので。

I：現代文化だもんね、ちょうどいいよね！ ただ結構大変ですけどね、レポートとか。

M：そう、レポートが多い！

I：でも、僕もとってたんですけど、やりがいのあるレポートでした。やっていいなって思える。

M：夏休みに先生の研究室に遊びにいこうかな、とっていて。先生が栃木県出身でわたしと同じ栃木県なんです。

I：へえ、なんかいいな！ そういうのを見つけられて。

M：どうですか、先輩方は？

N：僕は、ニュースの社会学っていう9号館の大教室で受ける授業なんだけど、毎回ドキュメンタリー番組を見させられて、それがすごいショッキングなものから、めちゃくちゃ感動するものまであって、毎回その感想を最後に書いて提出するっていうのなんだけど。それで、ドキュメンタリーの力を理解した。もうすごいドキュメンタリーが好きになって、そのおかげでいま3年生のゼミでドキュメンタリー専攻のゼミ（林ゼミ）に入ってます。

I：お～いいですね。そういうつながりがあるんですね。僕が面白いと思ったものは、現代社会論（2017年度は

先生が変わっています）っていう授業なんですけど、僕にとっては本当に難しくて。ルーマンっていう社会学者的にラスボスとされているらしい人の理論を使って現代社会を読み解いていくっていう授業で、ついていくのが大変だったんだけど、社会学部に入って1番新しい知識を得られた授業かなって思ってます。

M：単位とるのが難しかった授業ってありますか？

I：記述系が多いのはちょっと取りづらかな。ちゃんとわかってないと書けないしね。でも社科学部の授業で単位取れない授業って…（笑）。

N：あんまりないかもね（笑）。先生が優しいから！！

M：そうなんです（笑）。

——今、夢中になっている事はありますか？

M：私は今けっこう社会学の授業に影響を受けてます。

I & N：素晴らしい…。

N：これがさ、1年経ってくるとね。

I：だんだんクズになってくる（笑）。

M：でも、わたしすごい田舎者なんですけど、大学に来て自分でいろいろやらないといけないんだっていうのを知ったんですよ、例えば、履修登録も自分でやるじゃないですか、それとか好きな講演会に行きたいとか

言って応募するのも自分だし、何でも自分でやんなきゃいけないっていうのを知って、すごい積極的になれたんですね。それで、流行論受けて、ファッションとつながってるって知ったし、小泉先生（現代文化学科）の「アートの社会学」でアートともつながってるんだっていうのを知ったし、そういうので積極的になって。今夢中になっているのは、自分を育てることですかね。

N：ん〜〜！（拍手）

I：見習うところが多すぎる（笑）。

M：その先生とかに話聞きに行ったり、立教卒のデザイナーさんのところにインターンみたいな形でお手伝いさせていただいたりとか。社会学の授業を受けて、自分の興味を持ったつながりで、いろいろ積極的に人に声をかけて、お手伝いさせていただいたりしているの！

N：…まだ1年生だよな？

M：はい（笑）。そういうのが立教に来て広がった感じがしますね。

I：卒業後が楽しみだなあ。2年生の僕としては、僕は1年からバイト続けて、それは確かに夢中になっていることですね、得られるものが多い。アルバイトを続けて、大人とちゃんと会話できるようになったりして、いろんな人と話したり、つながりを持ったりとかそういう意識するようになったし。あとは、いつも

新しいことに挑戦してたいなと思っています。夏休みとか使って、英語検定や中国語検定の勉強はじめてたりしてますね。

N：お〜。3年生としては、自分の大学生生活は、さっきも言ったんだけど部活をのぞいたら特にサークルとか入ってないから、ほんと何も残るものないみたいなもんだから、今1番部活に夢中になってます。春の試合でも、今2部なんだけど、2部のリーグ優勝まで行ったのね、その1部の入れ替え戦で負けて2部残留ってとこだから、ほんとこれからの3年生、4年生の残りの時間で1部昇格を目指して、今夢中になっていますね。

M：すご〜い！ 部活に熱心になれるのはすごいと思います。

N：でもやっぱりちょっとサークルに入ってたっていう気持ちもあるけど。

I：入るんだったら何がいいですか？

N：サークル？ 映画研究会とかかな。

M & I：あ〜！

M：部活の話に戻りますが、けっこうOBさんとかつながりとかあるんですか？

N：うん。けっこうグラウンドに来てくれたりして、OBさんのところに訪問したりできるから。

I：そういうところが強いんですね、体育会系は。

M：そうですよね。部活やってると就活では言えることがたくさんある感じ

で！

I：そうそう、有利な感じがするよね。
部活には部活のいい点があるし、自由人には自由人なりにいい点がある！ということですかね。

――では、最後に、あなたが考える、社会学部の魅力とは？

M：わたしはやっぱり、入ってみたいとわからないことがたくさんある、っていうのが1番ですかね。社会学部は1番幅広いことに触れられる学部だと思うので、それはたぶん社会学の1番の魅力なんじゃないかと思えます。あと、面白い人がいっぱいいます(笑)。

I：確かに。変人って言ったらあれだけ(笑)。

M：そう、個性的ですね(笑)。だから色々な人からインスピレーションをうけられる。いろんな人の意見を聞いて。それも社会学の魅力ですかね。

I：いいですね！僕は、同じ感じなんですけど、入ってみなきゃわからないっていうのと、自分で大学生活をつくれる感じがするなあと思っていて、社会学部ってほんとにいろんな授業やって、自分の興味のある事にすごく手が出しやすいし、それを4年間続けていれば自分が形成される感じがして、人生にとってすごい大事なことを学べる学部なのかなと

思っています。さあ最後、しめてもらいましょう(笑)。

N：まじか(笑)。社会学部を3年間やってきて、社会学部は、ほかの学部はあんまりわからないけど、面白い先生がいっぱいいると思う。だから自分が、この先生良いなって思う先生を見つけやすいと思う。でその先生の授業とかを受けて、自分の道を決められるというか…うん、以上で(笑)。

I：はい(笑)。学べることが多いという事で(笑)。あとなにと言っておきたいことはありますか？受験生にむけてとか。

N：立教の社会学部は、洋服とかキラキラしてるイメージあるけど、結局何着てても大丈夫っていう(笑)。

I：確かに(笑)。そういうのも含めて、オープンキャンパスとかじゃない日に大学に来た方がいいですね。1周でも学内をまわってもらいたい。

M：うん、確かに。

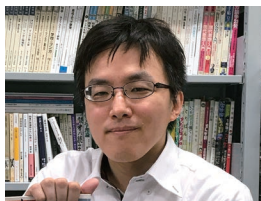
I：社会学部に入ったとしても、いろいろな学部の人と生活するから、ぜひ、足を運んで頂きたいですね。では、受験生の皆さん、立教でお会いしましょう！！でいいですかね(笑)。

N：いいんじゃない(笑)。じゃあ、この辺で！

M：お疲れさまでした！

(構成：伊藤元彦、渡辺理紗子、渡邊ひなの、松本和花子)

池上 賢 先生



助教。TA、SA より遠く、教授よりは近い存在。そんな助教の先生方の中から、今回は立教出身の池上先生取材しました。

——ご自身の学部生時代についてお話しください。

1998年に社会学部に入ったんです。元々歴史学をやりたかったんですけど、何故か滑り止めも含めて文学部全部落ちたんです。で、補欠から繰り上がって、偏差値が一番高かった立教の社会学部を最終的に選びました。どういう学生だったかについて話す前に、前提として言っておきたいのですが、大学っていうのは基本的に勉強する場所なので……。これは絶対使ってください（笑）。

なんでそれを言うかっていうと、僕は大学時代に全然勉強してないんだよね（笑）。当時僕にとってはサークルのマンドリンクラブで伴奏のギターを弾くことが最優先で、単位は取れさえすればいいやって感じでした。

だから学部を出た後、ウェーバーもデュルケムも覚えてなくて……。舐めた学生だったと思います。絶対に真似し

ない方がいい（笑）。

——学部生時代に面白かった講義はなんですか？

学芸員課程関連の授業ですかね。今にして思うと、博物館自体がメディアですから、「展示物をどう作って、どういうキャプションをつけて、何を伝えたいのか」っていうことを考えるプロセスが面白かったなど。

——学部卒業後は、書店にお勤めになられたとか？

某コミックショップに入りました。でも、すげーブラック企業だったんですよ。元々何年か働いたら大学院に行こうとは漠然と考えていたので、半年で辞めて、一念発起して、1年半ほどフリーターをやりながら大学院入試用の予備校に通って、そこで良い講師の先生にも巡り合っ

て、今までの人生の中で一番社会学を勉強しましたね。

**——院に戻っていらしてからは具体的に
どういうことをなさっていたんですか？**

少し原体験の話になるけど、僕が高校生ぐらいの頃に、夏目房之介って言う漫画評論家の人が「漫画は分析的に見ることが可能」って話を、TVでやったんです。ここで僕は初めて、漫画は十分研究対象になり得るっていうのを知ったんだよね。

それで最初は、統計を使って「大卒の人と高卒の人では読む漫画に差があるかどうか」みたいなことを研究しようと考えていました。それを、大学院に入ってから、学部時代のゼミの先生に相談したら、同様に統計を使う領域で研究されていた是永論先生の指導を受けることを薦められたわけです。ところが当時もう是永先生は全然違う研究領域に移行していて、結局、だいぶそこで軌道修正された感じですね（笑）。

院の時は是永論先生から論文の組み立て方などの理論面を教わって、桜井厚先生からインタビューの仕方などの実践面を教わりました。是永先生からは「池上くんはもうちょっと概念を細かく整理したほうがいい」って言われるんだけど、桜井先生からは「いいからデータを見なさいよ」って（笑）。結果的にそれが喧嘩しないでうまく作用したと思ってま

す。

博士課程では、漫画を含めたメディアに関わる人生経験を色んな人に聞いて、その人のアイデンティティーがどう作られるのか、を調べました。外部で発表すると、思ったより褒められることもあったし、学会誌にも載ったし。そうすると自信もついてきて、博論を書いている時なんかもう楽しくてしょうがなかった。「俺の書いている論文、なんて面白いんだろう」って思いながら書いてた。（※もちろん、読み直して反省することもあります [池上]）

——博士号取得後は何をされていたんですか？

就職なんか決まっていなかったんで、ゼミの共同担当を非常勤でやりました。それ以外は、某研究所と立教の事務仕事のアルバイトを。

ただ、運が悪いことに翌年に研究所と事務が満期になっちゃって。数年後には、知人の紹介で某ラーメンチェーンで正社員の経理の仕事始めて、会社員＋非常勤＋塾講師、で暮らしていました。「このまま、専業の会社員になってもいいかな」って思い始めた頃に、運良く立教大学の助教に採用されて、今に至ります。博士研究員時代は色々やってきたけど、結論から言うと自分の中では何も出来てないと思ってます。研究のやり方を忘れてたりもしました。でもそれは、僕に

限らずで、皆同じような苦勞をしてると思う。ずっと苦勞し続けている人もいるので「僕は就職できました。めでたしめでたし」とは言えないところが中々厳しいと思っています。

ちなみに今興味があるのは、「今のオーディエンスってオーディエンスじゃないよね」っていうテーマですね。不思議なんだけど、例えば「ある漫画」があって「それを読んで衣装を着てみましたって言うコスプレイヤーの子」がいて。じゃあ「その子を応援している人達」は何なのか。現代社会のメディアの在り方って「発信者」がいて「受信者」がいるっていう単純構造じゃなくて、「発信者」がいて「受信者」がいて、さらに「受信者から何かを受信する人」がいるっていう、複雑な構造なんだと思います。それを研究してみたいなっていうのはあります。

——「漫画研究者＝池上先生」と「漫画ファン＝池上さん」の2つの側面からオススメの漫画を教えてください。

この話は長くなりますよ（笑）。研究者としてだったら、『パンプキン・シザーズ』と『セントールの悩み』、藤子・F・不二雄の短編作品かな。最初の二つは思考実験っぽいことをやってるんだよね。話云々よりも設定がすごく面白い。藤子・F・不二雄の短編は、言わずもがなで、社会学部の学生だったら絶対読んでほしい。漫画版星新一って感じかな。

あと、『血だるま剣法 / おのれらに告ぐ』って作品は、差別の苛烈さを描いたのに、当時「差別的だ」って封印されちゃった漫画なんだけど、色々考えるきっかけになるよね。

いち漫画ファンとしては、僕に影響を与えた『ドラえもん』『あしたのジョー』『最終兵器彼女』『うしおととら』『寄生獣』を挙げたいと思います。この5つは、自分の中で別格です。最近では、まず『ドリフターズ』でしょう。「歴史上の人物がファンタジー世界に行って無双する」って、普通だったら痛々しくてしょうがない話だと思わない？ でも平野耕太が描くと理屈抜きに面白いんだよね。

あと『ヴィンランド・サガ』とか『へうげもの』も好きかな……。あとそうだ、『小林さんちのメイドラゴン』ってのが両方の観点から面白い。「関係性の面白さ」みたいなものが作品の根底にある気がして。ほらね。止まらなくなった(笑)。

——学者としての今後の展望をお聞かせください。

任期があと2年半ぐらいだから、それまでに就職先決めたいってのはあります。ちなみに「自分はもしかしたら、社会学あんまり好きじゃないのかな？」と思うこともあります。院にいた時に、「社会学的な観点からどうなの？」みたいなことをよく言われて、「こんな学問なら、徹底的に嫌いになってやる！」みたいな

時もあったりして（笑）。ただ、やることは社会学だし、自分のアイデンティティーとしては「漫画研究者」というよりは「社会学者」だって思ってます。ただ、学会とかで会った人に名刺とか渡すと「ああ、漫画の人ですね」って言われる（笑）。

——最後にメッセージをお願いします。

「苦労は買ってでもしろ」ってよく言うけど、しないで済むならしないほうがいい。世の大人たちは、若者を騙して働かせようとするから（笑）。大学の4年間って、本当にあつという間なんです。だから、今しかできないことを思いっきり楽しむことを意識してほしいなって。学生はお客様じゃないけど、色んな権限を持ってるんだから、大学をうまく使って、4年間を充実したものにしてくれと言っておきたいなと。もう一つ、友達は作ったほうがいいと思うかもしれないけど、作んなくても1人で楽しいんならそれでいいんじゃない？

（構成：大澤崇仁）





木村 自 准教授

きむら みずか

国立民族学博物館との出会い

小学校の時は学校の成績が悪い生徒で、でも一つのこと集中する子でした。特に生物が好きで、例えば校庭の池にいるメダカの観察を、授業が始まってもずっとしてるような生徒だった。学校の勉強がまったくできなかったから、親が異文化接触させたらこの子は変わるんじゃないかって考えて、僕に中国語を習わせたのが異文化と触れることになったはじまり。それが小学校5年生くらいかな。近所に住んでいた中国人の先生のところに行って、餃子とか食べながら、勉強してた。

文化人類学に興味を持ち始めたのは、中国語ももちろんあるけど、もう一つは小学校3年生の時に大阪の国立民族学博物館（民博）に連れて行ってもらったことかな。民博に行った衝撃は大きかった。アフリカから東アジア、オセアニア、南アフリカ、ヨーロッパまで、世界中の人々が使ってる様々なものが展示されている。例えばニュージーランド先住民マオリの穀倉だとか、カナダのトーテムポールと

かね。そういう世界中のものが所狭しと展示されている……そこで世界は広いなと、私たちが生きてる世界だけじゃないんだなと。それが一番最初に他の世界を知ってみたいっていう感覚を覚えた時。

中学では、吹奏楽部に入って、チューバって大きい楽器を演奏してました。うちの父親が絵描きで、芸術関係の環境は家の中で整ってたけど、絵は描きたくなかったから音楽に行ったのかな。

高校は寂しい生活を送って、大学が大阪外国語大学の中国語学科に入りました。それで大阪大学の大学院（人間科学研究科）に入って、専門的に文化人類学で、中華圏をフィールドにして研究を始めました。その後、国立民族学博物館の研究員に。運命的なものですね。

文化人類学は大学院を出てもなかなか就職先がないのよ。マイナーな学問だから立教大学に来る前は、大阪大学の人間科学部で助教をやっており、その後人間文化研究機構という研究機関で研究もちょっとやりました。

文化人類学と社会学

[現在担当科目の]「文化人類学」は入門の授業です。文化人類学という学問は、世界中の様々な見慣れない習慣、生活様式を知ることを通して、他者を理解する方法や理論を学びます。授業では基本的に講義が中心ですが、映像を観てもらい、私達のものとは異なる様々な習慣などを知った上で、議論を通して理論的なことを勉強する授業にしています。

3年生ゼミでは、前半は文化人類学のフィールドワークの方法論についての文献を読んでもらい、発表してもらいました。後半は1月末のゼミ論文執筆に向けて自分の研究のプランを立てたりとか、あるいは読んできた本を紹介するとか、インタビューに行った結果をまとめてもらったりとかしています。

ゼミ合宿で夏に宮古島に行って、宮古島の在住外国人の調査をしました。その調査に向けた文献購読と、質問事項の洗い出しとかをやった上で、学生に主体的にインタビュー調査をしてもらいます。自分で人にインタビューする経験はあんまりないと思うので、自分の社会学調査を始めるきっかけになると思います。人に話を聞くと、全然違う世界が見えてくるし、アンケートで書いてもらうのと異なって、面と向かって人の表情を見ながら話を聞くので、世界観が大きく変わり面白いと思います。

文化人類学と社会学はディシプリンと

して少し違うように感じるけども、方法論が全く違うってことはない。例えば文化人類学の研究方法はフィールドワークが中心で、村なりコミュニティに1年、2年住み込んで研究するのが普通です。社会学も同じようにフィールドワークを元に研究して成果を出していくことが多いから、それほど違いは大きくない。だから今のところはやりにくさは感じたことはないですね。

それよりも学生が積極的じゃない気がするな～。人は街を歩いていて不思議なものがあるとか新聞や本を読んで面白そうだなって感じるやん。それを自分のゼミの研究のテーマにしたりすると思うんだけど、今関心のあるものなんですかって学生に聞いてもあまり返ってこないことが多い。閃きもそうなんだけど、日常生活の中で色々面白いものとか不思議なものにもっと注目したらいいのになという気がして、それが残念です。

池袋の周りとかでもちょっと裏道に入ったりすると、今まで見えてこなかった風景が見えてくる。立教大学の近くでも、ちょっと裏通りに入ったら八百屋や魚屋さんがあったりして、こんな街の中心にこんな店があるのかと思ったりする。ぶらぶらしてみる、わざと迷ってみる。そういうのが一つの方法だと思います。

僕がよく行くのは、池袋北口の中国の雑貨とかがいっぱいあるところ。いいですよ。このあいだ、豊島区の区役所、文化観光館に行ってきたんですけど、そこ

で初めて知ったのは、豊島区はアートと漫画の街として売り出すそうで、乙女ロードとかあるんですね。僕は関西に40年生活していて、3年前に東京に来たので、東京をほとんど知らないのので、いつも新しい発見があって毎日楽しく生活しています。

(インタビュアー：船津晃一朗、構成・補佐：伊藤元彦&編集部)

中華圏・中華系の文化研究

元々は中国系の人、華僑や中国のエスニック・マイノリティの研究をやっていました。東南アジアと中国、台湾の間を行ったり来たりするような華人ディアスポラ、中国系マイノリティ・ディアスポラの研究をしていました。でも、最近は大いぶ違うことやっていて、台湾の視覚障害者のあん摩（マッサージ師）の研究を2016年から始めました。

日本にもたくさんいるんですけど、視覚障害者の職業としてマッサージ業が昔から中心的な職業で、台湾の場合は街のいたるところに店舗が設けられているんですね。視覚障害者の職業選択をあん摩業に限定していくのは、ある意味問題だという考え方があります。でも、そういう考え方に反して、台湾の視覚障害者は自分から進んであん摩業に従事していき、あん摩業を積極的に「盲人」の文化としてとらえようという動きがあります。障害者を取り巻く台湾社会の文化的背景にはどんなものがあるのかを調査しているのが最近です。(談)





貞包英之 准教授

さだかね ひでゆき

フーコーから消費社会論へ

大学の頃は、はじめから社会学に興味があったわけではありません。社会学がどういう学問かわかってなくて、大学では主に構造主義からフーコーにいたる思想の流れを勉強しました。その根本にあるのは、言語という問題系で、それで日本文学に進んだのですが、学部では社会学のゼミにも入りました。当時、上野千鶴子先生が『家父長制と資本制』を出した頃で、それをフーコーの『性の歴史』などに結びつけ授業されていたので。そういう関心で進んで行って、文学そのものというよりも、それを生みだし消費する社会の方に関心が移り、大学院では当時流行っていたナショナリズム批判やカルチュラルスタディーズの流れから、社会学のほうへ進んでいきました。

その関心の背景には、おそらく社会を成り立たせる根本的な土台を理解したいという欲望があったのだと思います。出身は山口県ですが、高校の時は地方都市を出たいと思っていました。その背景にも、今暮らしている場所の「外」が見た

いという関心があったと思います。具体的な場や出来事、私的なことを「外」から規定する抽象的な構造やシステムへの関心。それから歴史を具体的な研究対象としてもがき苦しみ、また地方都市についてもいろいろと調べたりするなかで、いまではシステムのなものと構造以上に、それを外れる社会的事実に関心があります。

そういった自分の学問背景から見て、近年は少し社会（学）に閉じている学生が多い気がします。大学に多様な専攻の先生方がいて、いろいろなことをやっているのでも、まずは自分の関心にリミットをかけず、積極的に関心を広げ勉強すればもっと良いのには思います。

私の場合は大学時代に、いちばん影響を受けたのはフーコーの研究です。『言葉と物』という本があって、「私たちが普段見たり経験してるものを規定するのは何か」を分析していて、衝撃を受けました。それからその本は、歴史的な関心、つまり私たちが今生きている社会はどう作られているのかということへの関心も開いてくれました。

ではなぜフーコー的な歴史分析から消費社会の研究に移ったのかといえば、社会を成り立たせる力として、言説や権力以上に、消費が大きな役割を果たし始めていると考え始めたからです。フーコーはそもそもあまり消費のことに言及していません。フーコーが主に理論構築したのは知や権力が社会を作り上げていくという話で、(おそらく言い過ぎですが)ボードリヤールにいわせれば、それで19世紀社会を有効的に論じられても、20世紀はそうではない。じゃあ21世紀は？ 私たちの現代社会をつくり出す力として消費という問題が出てきて、それを考えることが今の研究の主題です。具体的には、歴史のなかで消費がどういう役割を果たしてきたかの研究をこれまでできてきて、今は近現代社会で消費がもつ意味を都市や住居、大衆文化と結びつけ分析するという仕事を主にやっています。

担当している「消費社会論」では、まず消費社会論の基礎としてのマルクス主義やボードリヤールの理論を19世紀、20世紀の歴史を前提に理解してもらい、それを踏まえ現代社会で消費がいかなる役割を果たしているのかを講義しています。また今年担当した「現代文化論」はファッション、住居や漫画など、そういう様々な現代の文化を主にメディアやそれを介した消費という観点から論じました。

ゼミでは消費社会論の基礎的文献を読

むことから始めます。いろいろと悩む前に、まずは先人たちが何を考えたのかを勉強して欲しいので。その上で、ファッションやスポーツ、大衆文化などの現象を「場所」と結びつけ調査し発表してもらいます。消費を抜きにして現代社会を考えるのは無理という意味では対象は何でもよいのですが、それを消費という視点から、また具体的な歴史的背景から考えることがゼミの目標です。

古典のススメ

立教生に対してだけじゃないけれども、今の学生に対しては、まず古典的な本を読んで欲しいと思います。文学や映画、漫画でもいいですが、ある意味要領よく多くのものが消化できる社会になって、クラシックなものに触れずに通過してしまう人が多いと感じています。とくに社会に出ると時間もなくなるので、流行りのものに追いつくのが精一杯で古典的なものに触れる時間は無くなってしまいます。

社会学の文献でも、例えば新書的な本はこれからいくらかでも読む機会あると思うので、やっぱり一番時間がある大学生のときに、まずはデュルケムなどから読み始めてもいいのではないのでしょうか。

たしかにはじめは「面白くないな」と思っても、触れておくとのちのち役にたつ。古典は一種の共有財産というか、そ

れを一通りでも理解していると、それを下敷きにした他のものが読め、批判できるようになる。たとえば私は大学時代にカントを友だちと読んで以降、読書の幅が大きく広がりました。カントは近代的思考を切り開いた人なので、それ読んでいると、後のアカデミックな思考もバージョン違いというか、それとの葛藤のなかで生まれたものだとわかります。

悪いこととも言い切れないのですが、最近の学生は要領のいい人が多く、教科書や新書を読んでおしまいになる人が多く、もったいないという印象があります。何でもいいのですが、たとえば『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（ヴェーバー）を読むと、とりあえず書かれていることが、まずはかならずしも複雑ではないことが分かる。もちろん本に書かれていることを本当に理解することは相当大変なのですが、まずは直接読めば、以降、読める本の幅が広がりますから、なんにせよスタートすることが大切なのではないのでしょうか。（談）

（インタビューアール：船津晃一郎、編集・補佐：大澤崇仁&編集部）





横山 智哉 助教

よこやま ともや

投票行動の研究

今の担当科目は「社会調査法1」「社会調査演習」「現代社会研究F」、あとメディア社の「専門演習1」です。

今の研究は、僕たちは日常的にいろんな会話ってするじゃないですか、音楽の話とか。その中に一応政治の話とかも入っていて。割と調査とかしてみると、みんなそこそこ政治について話したりしているんですね、年齢が高い人とか、低い人もそうですけど。そういう人たちが政治について話すことが投票行動をどういうふうに促進するのかを研究しています。特に、すごい仲の良い人たち、家族とか友人とか恋人とかと政治について話すことに注目した研究を行っています。

2017年度日本選挙学会賞を受賞した研究（秦正樹先生（北九州市立大学法学部講師）との共同報告『「政治」の何がタブーなのか？：政治的会話の継続性と断絶性の条件』）では、もうちょっと広い、親密じゃない、一般社会では政治についてどういう風に喋るか。党派性とかイデオロギーとか支持政党が同じだと話

すんだけど、支持政党が違ったり、イデオロギーが違くと政治について話すことをやめちゃう。親密圏とそれ以外では、政治について話すメカニズムが違うという発見です。

喋っていて投票行動が促進されて、投票することによって政治がもし変わるとしたら、すごい小さい、もっと目に見えないミクロな部分とマクロな部分がつながっているから、政治的なダイナミクスとして、そういう動きみたいのが見えた方が楽しいと思ったんです。

僕自身は選挙に行けてのはあんまり好きじゃなくて。だって行けて言われて何も考えずに投票するってあんまり意味ないじゃないですか。自分の意見を伝えたいって時に投票っていう行動があるっていうのを学習するようになってほしいです。

大学の先生になるまで

僕、ずっと大学の先生になりたくて。今は全然もう覚えてないんですけど。小学校の卒業アルバム見たら「大学の先生

になる」って書いてあって。

僕が行った高校は進学校で。僕は進学校の中でも上のクラスじゃなくて下のクラスだったんですけど。新しくできた学校で、制度的にも部活ってというのがなくて、別に部活とかもしてなかったです。まあ勉強好きでしたけど、本とか結構好きでしたね。シャーロック・ホームズとかすごい好きで。

[大学入学に際して] なんとなく哲学やりたくて。哲学とか、政治哲学って分野があって、それをずっとしたくて。でも一方で、心を数字に、心理学とか社会調査もそうですけど、人の意識とかを数字に置き換えるじゃないですか。目に見えないものを、見えるようにする……そういうのがすごい楽しいなと思って、学習院に入りました。

学習院って結構心理学の歴史が古くて、伝統がある学科の1つなのでそこに決めて。心理学科なので、ずっと心理学実験をやるんですけど。被験者を実験室とかに呼んで心理学の研究をやりました。

アルバイトは、家庭教師とかやっていましたね。あと、ある予備校で、現代文とか小論文とかの添削をやっていました。

大学は釣り部に入っていたんですけど、友達が釣り部の部長だったので「僕釣らないけれど良い？」って言って、入っていました。

大学院では世論調査とかをやりたくて、大学院は社会心理学専攻で一橋に入って。実験よりは、世論調査をベース

にした研究室で。修士・博士って行って、博士号を2017年の3月にとって、そこから運良く4月にこっち(立教)に来たって感じです。

所属はメディア社会学科ですけど、もともと心理とか社会学部とかそういう領域の名前に限定されないメディアとかの効果にずっと興味があって、そういう研究をしてきました。

立教の研究環境はすごくいい環境です、ほんとに。雰囲気はやっぱりいいですね。立教は社会学部の中に現代文化、メディア社、社会があるじゃないですか。だから色々な先生と交流できる。一橋はあんまり交流がなくて、どっちかっていうと研究室単位で、あまり交流がなかったのも……。

おすすめの本

最近のおすすめの本は、基礎演習の課題本の『ポピュリズムとは何か』(水島治郎著、中央公論新社、2016)。今ヨーロッパとかアメリカのポピュリズムが問題になっていると思うんですけど、それが、なんでヨーロッパとかでポピュリズムとかが生まれたかとか、ポピュリズムとは何かとか、そういうメカニズムみたいなものがあって面白かったですね。(談)

(インタビュー: 船津晃一朗、編集・補佐: 川内ゆめ子&編集部)

OBが語る、航空業界ではたらくグローバルな視点

社会学部1年 渡邊ひなの・松本和花子



2017年11月28日、立教大学の太刀川記念会館で、社会学部・社会学研究科同窓会主催の第1回講演会が行われた。テーマは「OBが語る、航空業界ではたらくグローバルな視点」だ。講演者は、日本航空で運行乗務員をされている木賀孝彦（きが・たかひこ）さん（1989年社会学部産業関係学科卒）。キリッとした佇まいは、まさにイメージ通りのパイロットを思わせるが、講演会の内容はとても軽やかで、ユーモアさえ感じさせるものだった。木賀さんは、大きく4つのことについて、お話ししてくださった。

まず第1に、航空業界についてだ。航空業界は運輸業界に属するが、サービス業としての側面も持ち合わせている、と木賀さんは言う。私たちが直接サービスを受ける、グランドスタッフやキャビンアテンダントなどを想像すれば、納得できるだろう。また、陸海空とある運輸業

界の中で、人とモノを早く安全に運ぶ、というのが航空業界の特徴だという。公共的であり、かつ飛行機にしか成し得ないことをする役割を果たすのが航空業界である、とおっしゃっていた。

第2に、日本航空（以下JAL）についてだ。JALの企業理念に、社員全員の幸福を追求してお客様に最高のサービスを提供する、というものがある。JALは最高のサービスを提供するためにまず、社員が幸福であることを前提としているそうだ。過労死やブラック企業が問題視されている今日の日本だが、JALの企業理念には確固たるものがあると、自分の務める企業について生き生きと語る木賀さんを見て確信した。

第3に、JALのパイロットについてだ。パイロットの仕事内容や持ち物、副操縦士との会話、私たちがなかなか知ることのできないようなコックピットの中の様子

までもうかがうことができ、とても興味深かった。パイロットは自分が操縦する飛行機が一番好きになる、と木賀さんは語る。また、パイロットは、安全性を追求し、揺れや騒音の少ないフライトや環境に優しいフライトというサービスを提供する役割を担う職業だという。これも、航空業界がサービス業である所以である。パイロットは華やかな職業というイメージが強いが、訓練と試験が退職まで続くという点で、苦しいこともあるということもわかった。

最後に、パイロットになるにはどうすればよいかについてだ。1つには、木賀さんのように、航空会社の自社養成コースに合格する、ということが挙げられる。入社前に特別な知識は必要なく、学部や性別、国籍も問われないという。実際、芸術学部や医学部出身のパイロットがいるという話もあり、驚いた。健康であれば、特別な体力も必要なく、視力も矯正視力が1.0以上であればいいという。パイロットへの道は、意外と多くの人に開かれている。

この日、太刀川記念館に集まった参加者は、終始木賀さんのお話を熱心に聞いていた。参加者の中には、子供の頃からパイロットになりたいと夢見ていた学生もいた。学生時代に、様々な職業の先輩にお話を聞くことほど貴重なものはないだろう。実際に経験して辛かったこと、成し遂げて嬉しかったことなど、企業のパンフレットだけではわからない、生の

声というものが私たちには必要なのではないだろうか。



社会学部 新キャリア支援企画潜入レポート

社会学部1年 大澤崇仁



2017年11月13日お昼休み。私は、池袋キャンパス7号館隣りのメジャーラーニングcommonsを訪れた。社会学部が2017年度から新しく取り入れた、キャリア支援の試みである「就活生×内定者ランチミーティング」の取材のためである。

キャリア支援のための企画と言えば「各界で活躍している卒業生による大講堂での講演会」や「某就職情報会社の社員さんによる説明会」のようなものを想像する学生も多いことだろう。学部1年で、将来の夢も絞りきれていない私もその例にもれず、トップダウンなお堅いイメージで頭が凝り固まっていた。

しかしこの企画は、従来型のそれとは少し趣が違う。ゲストスピーカーは各業界（今回はメーカー、メディア、建築・不動産、の3分野）に内定をもらった学部4年生や大学院生だ。3×3列、9席分の小さな“講堂”の前で参加者を待つ

その姿は、私たちが普段接している先輩そのままである。その親しみやすい雰囲気を保ったまま、参加者が集まり次第、各分野ブースごとに緩やかに会話が始まる。驚いたのはゲストスピーカーの自己紹介が終わった後、その第一声が「何か質問ありますか？」であったことだ。そこから先は台本も用意していなければ、パワポ資料もない。参加者からの質問を中心に、小さな“講演”（というよりお喋り）が展開されていくのだった。

参加者10名強のうち約8割は、まさに就活に臨もうとしている学部3年生だったためか、出される質問は、非常にストレートかつ実践的な何かしらの解答を求めている。「業界選びで迷っているのですが……」といった自身の切実な悩みから、「インターンで落とされると、本採用でも同じ人事の選考なので、結果も同じになると聞いたのですが……」といったテクニク的なものまで幅広い内

容だった。グループワークほどの人数であるため、内定者の先輩方も即応してくれる。「1ミリでも興味があったら飛び込んでみると良い」「俺が人事だったら、1度落とされても、2度目を出してくる奴からは熱意を感じるけどね」といった金言が多く飛び出した。

「ランチミーティング」と銘打ちながら、誰も昼食をとらないまま約20分、ブースをローテーションして2業界分の「ぶっちゃけトーク」が行われた。折角なら3業界すべての話が聞きたかったが、時間的な都合もありここで終了。休み時間の井戸端会議の感覚で、内定者の先輩の赤裸々なお話を少人数で間近に聞いた参加者の顔は、どことなく晴れ晴れしていたように見えた。

担当の社会学部准教授、井手口彰典先生によると「社会人や教員、キャリアセンターの立場で言えることもあるけど、学生同士で話してみることも大事。これからのこのような適度な人数でざっくばらんに話ができる企画は続けていくので、アンテナを張り巡らしておいてください」とのこと。就活間近という学生はもちろん、私も含め就活まで余裕があるよという学生も、ぜひお喋りをしに来る感覚で参加してみたい。



まるで口の中が異国、北池袋でビリヤニを食らう

社会学部3年 野路 学



処暑も過ぎた9月のはじめごろ、私はどうしてもある食べ物が食べたかったのです。そう、「ビリヤニ」です。日頃から昼間にサウナや銭湯に行き、夕方さっぱりとしたものを食べるのが好きなのですが、ここ最近、何かもっとガツンとしたものが食べたくて仕方がない状態でした。そんなときに惹かれたのが「ビリヤニ」です。さきほどからビリヤニビリヤニ言っていますが皆さんはご存じでしょうか。ビリヤニとはインドやその周辺国で食べられているスパイスとお肉の炊き込みご飯です。その癖のある風味と一度聴いたら忘れない料理名は、まさに異国の食べ物といった感じ。

もう銭湯終わりの夏の夜にぴったりで

はないか。ということで北池袋にある『マルハバ』という店に行ってみました。北池袋の少し暗い路地を徒歩6分ほど歩いたところにマルハバはあります。お店は2階にあって、一目見ただけでは通りすぎてしまいそうなひっそりとした佇まい。その日、店内には私たち以外の客はおらず、パキスタン人と思われる主人と友達がカウンターで楽しそうにくつろいでおり、カウンターの上にはテレビが置かれ、何語で話しているのか、インド映画のような番組が流れていました。いまにも机の陰から大勢のインド人が現れて踊りだしそうな空間にドキドキしながら席に着くと、主人がテーブルにお水をもってきて、気取らない愛想のよい話し方でメニューの説明をしてくれました。メニューには念願のビリヤニのほかに、様々なカレーやナンもあって、私はチキンビリヤニとデザートにキールを注文。ちなみにイスラム教なのでお酒はおいていません。なのでラッシー（通称飲むヨーグルト）を注文しました。

しばらくして念願のチキンビリヤニが登場。そのボリュームと味に大感動！インドのお米を使っており、すこしもちもちした触感。そこにインドのスパイス

が合わさって、まるで口の中だけが異国になったような気分でした。少しピリッとした辛さはラッシーとの相性が抜群です。最後にピスタチオと牛乳と人参と米を混ぜたインドのデザートのカールを食べて、大満足で店を出ました。

誰にも教えたくないような空間と料理に出会えるパキスタン料理店マルハバ。ランチタイムにはカレーセットやビリヤニセットも割と低価格でやっているみたいなので、ぜひ異国の風を求めて訪れてみてください。マルハバでしか食べれないブレンマサラ（羊の脳みそカレー）というスペシャルカレーもあります。主人のイチオシらしいので一度味わってみたらいかがでしょう。



おすすめしたいけどおすすめしにくい、
でもやっぱりおすすめしたい

大学院生の一冊

大学院・社会学研究科博士課程 伊藤慈晃

講談社, 1994年
(定価:1050円+税)



今回紹介するのは、小松和彦の、『憑霊信仰論(ひょうれいしんこうろん)』(講談社、1994年)だ。小松は民俗学に文化人類学的なアプローチを取り入れ、新たな研究領域を切り開いた人物。近年は妖怪研究に注力しており、少しキャッチーな紹介をするなら、平成の『妖怪学の祖』といえるかもしれない。

本書には8編の論文が掲載されている。中でも『『憑きもの』と民俗社会－聖痕としての家筋と富の移動－』は白眉。少しその内容を紹介しよう。

私たちは日常の中でしばしば、「つきが廻ってきた」とか、「ついてない」とか使うことがある。小松によれば、この「つき」とはかつて「憑き」だったそうだ。「憑き」というと、今の感覚からすれば、『霊に憑りつかれているなんて、気持ち悪い』となるだろう。しかし、ではなぜ「つきが廻ってきた」という、プラスの意味での使い方が残っているのか。実は、かつての社会では、「憑き」はマイナスだけでなくプラスの意味を持つこともあったのだ。小松は、そうした「憑き」という概念を、昔の人々がどのような感覚で使っていたのか、それが社会の中でどのよう

な意味を持ったのかを、狐や狗神(いぬがみ)、座敷童子(ざしきわらじ)なども例に出しつつ、丁寧に解き明かしていく。

さて、小松の本の中でも、特にこの『憑霊信仰論』を選んだのには、内容の他に、もう一つ理由がある。それは、この本に収録されている論文は、どれも小松が20代後半くらいに書かれたものだからだ。そのため、論の進め方は「論文」の作法に非常に忠実だ。特に、人類学的知見から「憑き」について検討した後、ゴフマンの「聖痕(スティグマ)」の概念をフックに、具体的な事例を分析していく過程は、非常にシャープ。けれど、明瞭な展開は、必ずしも簡単に思い付くものでもない。

「論文」という形式は、受験勉強で読んできた文章と随分と毛色が違う。もしその違いにつまずいている人がいたら、先達が若い頃にどのように論文を作り上げたのか、その思考を辿りながら読むことは、きっと多くのヒントをくれるだろう。そして、社会学部という非常に恵まれた環境をフル活用して、ぜひ研究の面白さを体感してもらいたい。

大学院ってどんなところですか？

大学院・社会学研究科博士課程前期課程 1年
向山夏奈



「大学院生って半分フリーターみたいなものですね」と社会学部生から言われたことがある。「何してんのかマジ不明っす」みたいなことも言われた。違う、違う、そうじゃない～（鈴木雅之）。院生は学生で、だからもちろん授業もある。みんなと同じように六大学の優勝を喜んだり、LAWSONにいたペッパーくん（注）のその後を心配したりしている。そんな院生へのアツイ風評被害を吹き飛ばすべく、筆をとることにした。わたしたちの生態を伝えることで、少しでも大学院生を身近に感じてもらえたら幸いである。

ロイドホールに住んでいます

「良い修士論文をかきあげること」が私たちの本業なので、基本的には院生室（@池袋キャンパス・ロイドホール4階）に自分用のデスクと書棚をもらって、文献を読んだり、フィールドに調査に出たりしている。かたわら、大学院が開講する授業に出席する（卒業要件は32単位）。人数は多くても10名。大半が文献輪読とディスカッションだから「ずっとゼミをやっている」感じ。

20代から60代まで

立教大学大学院社会学研究科博士課程前期課程（いわゆる修士課程。2年制）には現在約30名が在籍中。そのほとんどが他大学からきていて、社会学部からの内部進学者はわずか5名。卒業した後の20代から、企業を定年退職したのちに入学した60代までと年齢もさまざま。

そんな「半分学生、半分オトナ」なわたしたちは、談笑中でも恋愛や家族などプライベートに関する話題をほとんどしない。サークルや学部ゼミ、バイトでの人付き合いとはずいぶん違う。一見するとよそよそしく感じるかもしれない。でもそれは不仲だからではなくて、この世にはいろんな生き方や価値観があることを社会学を通じて実感し、それを尊重しているからだと思ふ。とても心地のよい空間である。

YOUは何しに大学院へ？

「大学院で社会学を学びたいと思った理由」を院生室の数人に聞いてみた。

【人生の心残りを果たす派】

・「台湾に留学したときに向こうの学生

の勤勉ぶりに圧倒された。とんでもない分厚さの本を2週間で読み切る、とか。そのとき、俺はこれでいいのかなって。もっと学びたいな、と」(Cさん)

・「元々ドラゴンボールの千豆を自分でも作りたと思ってて。でもわたし文系だし、学部のゼミも厳しすぎて農学に関する研究ができなくて。就活しようと思ったけど、諦めきれなかったから、大学院で環境社会学を学ぼうと思った」(Oさん)
・「学部のころから院に進んで社会学を学びたいと思っていましたが、金銭的なこともあって就職。定年まで民間企業に勤めました。でもそのあいだもずっと大学に戻りたいという気持ちが消えなかった」(Nさん)

印象的だったのは、「少しでも勉強したい、という気持ちや心残りがあんなら挑戦したほうがいい」というNさんの言葉。みな「人生いちどきり」「もっと学びたい」という情熱のもと、学問に励んでいる。

【真実を究明したい派】

・「父親が転勤族だから、自分には『ふるさと』と呼べる場所がなくて。その概念が不思議でしょうがなかったので研究しようと思って」(Mさん)

・「バーをこよなく愛しているんだけど、酒場研究をしている人が社会学ではまだまだ少ない。俺にしか解き明かせないバーの真実があると思ってる」(Sさん)

個人的なエピソードと研究テーマは結びつかないと思われがちだが、社会学は

「モノの見方や切り口」が問われる学問。ゆえに個人の素朴な疑問や発想も大切だ。

こういう人生もあり！

ちなみに筆者の場合はごく単純で、「就活に失敗したから」です(大マジ)。そのとき、ゼミの指導教授から「院に入ってゆっくり考えるのもアリだよ」と言われて、心底ラクになった。学生から進路相談を受けることがよくあるが、「ああ、この子はまだ社会に出るときじゃないのかも」「なかなかホネがあるヤツなのにもったいない」という人がたくさんいる。いまの大学生は卒業後の選択肢があまりにも少なすぎるのではないか。進学するには費用がかかるから誰彼かまわず勤めることはできないし、悩みながら就職していった末に仕事にやりがいを見出す人もいる。

でも研究に打ち込み、なんとか「答え」を見つけ出そうともがく院生たちを見ると、「なんて潔い生き方だろう」と思わずにはいられない。だから学部生のみなさんにも、その選択肢が開かれているということに気が付いてほしいのだ。

(注) 立教大学池袋キャンパスの売店・セントポールプラザ(通称センプラ)は、2017年に1階がローソンとしてリニューアルされました。オープン記念に、ロボット Pepper が短いあいだ店内に設置されていました。(編集部)



編集部だより

2016年度の『プレ創刊号』を経て、いよいよ創刊いたしました『社会学部報』。当初は教員が一元的に投稿記事を集約する方法が良いかと思っていたものの、参加学生たちからの「編集部方式でやりたい」という思いはことのほかアツク、船津編集長（社会学部2年）のもと、新体制がスタートしました。厳密にはサークルでもなければ、アルバイトでもない学部報記者の活動。モチベーションと連帯感の維持については、学生たちの苦労も垣間見えました。

実は私自身、小学校高学年から大学（学部）まで一貫して、サークルなどで学校新聞的なものを作ってきました。その時の経験が、意外なかたちで役立った……そう思いたいものです。ジャーナリズムへの思いは、大学の時に留学して「宗教社会学」の講義を受講したことで、社会学への志向へと変貌してゆきましたが、ヨノナカのことを取材して、世界を把握し記録しようとする点では、雑誌メディアも社会調査も変わりありません。

生井先生も2017秋学期にはサバティカルに入られ、若干心細い中での編集作業となりました。また、ひとり一記事担当制を徹底することも、次年度以降の課題のひとつかもしれません。

現代文化学科教員 小池 靖

【編集部員募集！】

『社会学部報』は、学生による学生のための新しいメディアです。編集部員を随時募集しております。立教社会学部・研究科学生であれば、学年は自由です。編集、ライティング、写真など、関わり方も様々です。経験不問です。興味がある社会学部生は koike-toiawase@rikkyo.ac.jp までメールを！

社会学部報 創刊号 2017

2018年2月21日

編集長 船津晃一朗

取材・執筆 浅野有亮
伊藤慈晃
伊藤元彦
大澤崇仁
川内ゆめ子
杉山奈緒子
野地 学
松本和花子
向山夏奈
渡邊ひなの
渡辺理紗子
(五十音順)

表紙・立教大学風景写真 村上 彩

印刷 望月印刷株式会社

〒171-8501
東京都豊島区西池袋 3-34-1
立教大学社会学部
学部報編集委員会 監修



立教大学

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1